タゴール作“Gītāñjali”について
——その2——

田　中　一　男

詩歌集“*Gītāñjali*”は Tagore の作品史上最も重要なものである。しかるに，その詩や歌の一つ一つには，難解なものが多く，況んやその全相を忠實[1]に捉えることは，更に困難である。印度人の Tagore 研究家でさえ，その一つの詩に對する解釋に於いて種々の異見を出している。ここに，Tagore の詩歌を可能な限り正しく解釋せんための適切なる研究方法として，この作品自體がもつ問題點を問題論的に見出すことを肝要と考える。解釋の鍵となるべき問題點は，その單純なものより複雜なものへと向うべきであり，さすれば常に，目前の扉に對してヒントとなる何らかの鍵を持つて參ずることが出來よう。

先ず第一に，原作そのものである Bengal 語の“*Gītāñjal*”(以下 B. G と略す)に對して題名を等しくする，著者自身による英譯詩集が存在するという事實である。しかし，ここに一つの壁がある。それは原作の B. G. が，制作年代順に並べられた韻文の詩歌集であるのに對して，同名の英譯詩集は B. G. の中から選ばれた53篇を中心に，その前後にまたがる若干の詩歌集より選擇，散文譯された作品とからなる，いわば順序を自由におきかえた寄せ集めの詩集であるという單純な事實である。この單調な疑問點を解く鍵が，B. G. に附された著者自身の序文の次の部分にある。

「この詩集の最初の若干の作品は既に一，二の書物に發表されたものである……」というが，それらの詩が B. G. の作品のどれに該當するか詳らかにはされていない[3]。調査の結果，B. G のNos. 1～20 がそれにあたり，そのうち，Nos. 8～13 は“*Cāradotsaba*”という戯曲中に，殘りの14篇は“*Gāna*”[4]という歌集

---

(1) 印度學佛教學研究 IX-1. pp. 174-175 參照
(2) 同
(3) Rabīndra Racanā balī. X. p. 3.
(4) R. R. VII. p. p. 389-423.
(5) *Rabīndra Racanābalī* には，收錄されていない。

に發表されていることが分明した。この最初の20篇を除いたあとの137篇（卽ち B. G. Nos. 21〜157）こそ，その成立期間から推してもかつてない集中力をもつてつくられており，實際上これをもつて "*Gītāñjali*" なる作品と呼んでよい。[6]

そこで，この見解を裏付けんがため，英譯 "Gitanjali"（以下 E. G と略す）頭初の詩を原作に對照してみると（E. G. No, 1 は次頁末尾に掲げた）

E. G.（No. 1）≠ B. G.（No. 1）または，O. G.（No. 1=B. G. 21）

E. G.（No. 1）＝ *Gītimālya*（No. 23）

しかるに，O. G.（No. 1）と *Gītimālya*（No. 23）を對照してみるに，共に16行2節からなる押韻の詩であり，全く同一のモティーヴをみることが出來る。

Gītimālya XXIII.（E. G. I）[7]

あなたは私を限りなくした。
　それがあなたの戯れなのですね。
わたしをすっかり空にして
　新しい生命で，また充した。

無數の山，無數の河岸に
この小さな笛を持運んで
數々の調べを奏でましたね—
　それを私は誰に語ろう。

あなたのこの不死の感觸で
　わたしの心は
大きなよろこびに限界を超えて
　言葉がこみあげる。

唯一握りの贈り物で
夜晝となく私を充してくれた—
幾年月をえるとも，充されるまで
　たゞ私は渴望するでしょう。

O. G. I（B. G. XXI）[8]

われ知りぬ，いついかなる泉より
生命の流れにわれを浮べしか
きみよまた，思いがけずも幾多の家に路に
　數多の歎びをわが心（むね）に遺し去きぬを。

幾度かきみ，雲をまとい
かくやさしく笑（え）みてたち
曙の光線（ひかり）に脚ふまえ，
　目出たき手觸りを額におきぬ。

この眼に保たれてあり
幾度も，幾多の人に
數多新しき現象（ながめ）のうちにみし
　形なきものの形象（かたち）。

幾世えて知るひともなし
わが心（むね）に數々の幸せに，悲しみに
數多の愛に，歌に
　甘露の雨，みちあふれしを。

（6）この137篇の制作期間は約一ヵ年の間であるが，實際に費された日數は，わずか90日である。これをさらに二期に分けると，I. *Bhādva*. 10日〜*Phālguna*（(Bengal 暦，1316年）までの23日間に B. G. Nos. 21〜54 までの34篇，II. *Catitra*. 26日（B. 暦1316年）〜*Çrābana*. 29日（B. 暦1317年）の4ヵ月間の68日に103篇

（7）R. R. X. p. p. 153. *Çāntiniketana* にて，1319年（B 暦）*Baicākha* 月7日作

（8）R. R. X. p. 20. *Bolapura* にて，1316年（B. 暦）*Bhādva* 月10日作

B. G. (No. 21) は *Gītimalya* (No. 23) 同様，彼の生涯の始りについて歌つているが，大詩人である神に對する詩人の自覺は，次の O. G. (No. 2=B.G. No. 22) に歌つていて，これは E. G. (No. 2) に英譯されている。これに對し E. G. (No. 1=G. m. No. 23) では，彼の生命の始まりを詩人の生涯の始まりとして歌い，その詩人，音樂家としての理想に到達するまでには，誕生と死の諸々の輪廻を通過しなければならぬという自覺を表現している。

さて Tagore が，O. G. (No. 1.=B. G. No. 21) を E. G. の初めにおかず，*Gītimālya* (No. 23) をもつて來たのは，後者の方が歌としてすぐれ，テーマもすつきりしているからだと思われる。その上前者のイメージはインド的であり，後者が一般性をもつているからだと推測される。

以上により，O. G. (No. 1) 卽ち，B. G. (No. 21) と E. G. (No. 1) 卽ち，*Gītimālya* (No. 23) をもつて，"*Gītāñjali*" という作品の主要なモティーヴと推定することが出來よう。

ベンガル語の Romanize は，イタリック體にした。

E. G. No. 1

Thou hast made me endless, such is thy pleasure. This frail vessel thou emptiest again and again, and fillest it ever with fresh life.

This little flute of a reed thou hast carried over hills and dales, and hast breathed through it melodies eternally new.

At the immortal touch of thy hands my little heart loses its limits in joy and gives birth to utterance ineffable.

Thy infinite gifts come to me only on these very small hands of mine. Ages pass, and still thou pourest, and still there is room to fill.